

Saussure と時枝誠記の主体的言語観についての再検討¹⁾ ——*Cours de linguistique générale* と『国語学原論』を基に——

松 中 完 二

0. はじめに

現代言語学は、その形成と発展の多くを 1916 年に刊行された Saussure の代表的書である *Cours de linguistique générale* (以下、*CLG* で表す) とそこで展開された学説に負っている。そして Saussure の学説はわが国において最も敏感に受け入れられ、その主張について様々な賛同や反論を生んだ。そこでの最も大きな議論の一つが、国語学における四大文法の一つである「時枝文法」の創始者である時枝誠記による Saussure 学説の全面的な批判である。

本稿では、*CLG* とその邦訳である小林英夫の『言語学原論』ならびに時枝誠記の『国語学原論』を基に、*CLG* で展開された Saussure の中心的主張である「語る主体 (*sujets parlants*)」と『国語学原論』で展開された時枝誠記の「主体的な価値意識」の相違について考察する。

1. Saussure 研究の潮流

1・1. Saussure 研究と *CLG*

Saussure の学説は 1916 年に出された *CLG* と小林英夫によるその邦訳『言語学原論』(岡書院、1928 年)、『改訳新版 言語学原論』(岩波書店、1940 年)、『一般言語学講義』(岩波書店、1972 年) に集約される。Saussure の学説といえばその代表的書が *CLG* というのがこれまでの定番であり、それは今日でも同じである。

しかしその一方で、*CLG* には常に深い闇と問題がつきまとう。*CLG* は Saussure の直接の手によるものではなく、1907 年、1908～1909 年、1910～1911 年に Saussure がジュネーヴ大学で三回にわたって行った一般言語学の講義を聴講した学生達の取ったノートを、Bally と Sechehayé が Riedlinger の協力の元に再構成、統合して編纂し、1913 年に Saussure がこの世を去ってから 3 年目の 1916 年に Sechehayé と Bally によって刊行された死後出版である。しかも Bally と Sechehayé は Saussure の講義に出席しておらず、*CLG* は Sechehayé による独断と再創作といってもよい。*CLG* に巣食う深い闇と問題は全てここに起因する。そこでの記述は Saussure の思想の断片が都合よく切り貼りされたパッチワークに過ぎず、それがつぎはぎだらけの *CLG* の記述の“ムラ”となって表れていることは、早くから指摘されて

きた。はたしてそこに Saussure の真の言葉と主張がどれだけ盛り込まれているかは、はなはだ疑問である。

CLGに見られる Saussure 学説の不自然さと矛盾点について言語学的視点からいち早く指摘していたのが国広哲弥である。国広は、「ソシュールは（理論的矛盾点に）大して悩むことなく、さらりと逃げているように見受けられる」²⁾、「ソシュールは自説の誤りに気付かないまま、何の説明にもならない言辞を吐かざるを得なかった。（中略）これがあの明敏なソシュールの言であるかと我が目を疑わせる」³⁾などと、早くからその不自然さと矛盾点を繰り返し指摘してきた。とりもなおさずそうした事実は、何よりも丸山圭三郎ら Saussure 研究家の間でも認められ、それに対する学説の修正や解説が繰り返し試みられてきたことは、これまでの研究の歴史が雄弁に物語っている。松澤和宏⁴⁾に至っては、CLGにおける矛盾点を「支離滅裂に陥ったソシュール」とさえ言い切っている。

また CLG の内容の不整合については訳者である小林自身が誰よりもいち早く、また身をもって感じており、それは『改訳新版 言語学原論』の「訳者の序」における、小林自身の以下の告白からも明らかである。

（前略）かのフランス的明晰と称せられるものの必須条件とされているが、ソシュールの文章は正しくこれらの条件を満足させる。

（中略）もし本書が難解であるとするれば、その理由の大半は、思想そのものの深さにあるのである。しかし不幸にして、もう一つの理由を数えねばならぬ。それは次に掲げてある刊行者の序に明らかなる如き本書成立の事情によるのである。即ち著者はこの場合字義通りの著者ではない；講義の草案と学生の筆記とを照合して、刊行者が編纂したものである。多少の矛盾を包蔵するのは、やむをえないことである。⁵⁾

この問題は現在でも同じで、似たような言葉は以下のものを代表に、あちこちで散見される。

原文の明晰さはその通りだが、それが勢い余って内容まで単純化しているように思われて仕方がない。それに反して、訳文は、難解さに満ちている。⁶⁾

われわれは時として小林英夫訳『一般言語学講義』（旧版は、『一般言語学原論』）を読んで、その言葉づかひの不自然さ、接続詞の不明瞭さに気がついて原著をひもとくことがある。たいていの場合フランス語の原文にもその不自然さは残され、どこからそれが生れたかと思う。原因は原文のテキストが均一の織物でできていないからだ。⁷⁾

1916年のCLGの刊行以来、20世紀中におけるSaussure学説の研究ではCLGと小林英夫によるその邦訳が主たるものとして扱われてきた。また当時時枝が批判を展開したSaussure学説は、全てCLGと『言語学原論』、『改訳新版 言語学原論』を基にしたものである。よって本稿でも日本語訳は小林訳を用いる⁸⁾。しかし1996年にSaussureの屋敷の庭仕事用倉庫から1万枚以上にも及ぶSaussureの自筆草稿が発見される。そして2002年には、1996年に発見されたこのSaussureの自筆草稿がSimon Bouquet & Rudolf Englerにより、*Ferdinandde Saussure, Écrits de linguistique générale*. Gallimard. (本稿では「ガリマール版」で表す)として刊行される。さらに2013年には「ガリマール版」の邦訳として、松澤和宏校注・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集「I 自筆原稿『言語の科学』』(岩波書店)が刊行される。

松澤和宏校注・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集「I 自筆原稿『言語の科学』』は、それまで主流であった小林英夫訳によるCLGに対して一線を画するものとして、ここでは特に大きな意味を持つ。ではなぜそれまでのSaussureの学説とCLGに線を引く必要があったのか。そこに回答を与えるのが他ならぬSaussureの自筆草稿であり、これまでSaussureの学説に反意を露にしてきた時枝誠記の主張なのである。

1・2. Saussure 研究の新時代

CLGの刊行から100年目を迎えようとしている現在、Saussure研究史上間違いなく最高峰の成果である小松英輔らによる修正や解説、松澤和宏らによるその翻訳、出版という偉業が形を成しつつある。本稿が目指すのはSaussure学説の掘り起こしやそこでの思想内容の修正ではなく、あくまで意味研究の立場からSaussure学説の不備と不整合の問題を洗い出し、そこになんらかの形で解答を与えることである。その足掛かりとなるのがSaussureの自筆草稿であり、それらの翻訳である。

本稿では、以下の5冊の最新の資料に全幅の信頼を置き、これらをSaussureの生の声としてSaussure学説の拠り所とする。

1) E. Komatsu, *F.de Saussure, Cours de linguistique générale. Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin*, (Collection recherches Université Gakushuin n° 24,1993)とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義<増補改訂版>』エディット・パルク、2009年。

2) E. Komatsu, *F.de Saussure, Troisième cours de linguistique générale(1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin*, (Oxford: Pergamon Press, 1993)ならびに小松英輔『ソシュール自筆原稿の研究』平成6年~平成8年度 科学研究費補助金基盤研究B(2) 研究成果報告書 課題番号06451091、1994年とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年。

3) E. Komatsu, *F.de Saussure, Premier cours de linguistique générale.(1907): d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, (Oxford: Pergamon Press, 1996) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第一回講義 リードランジェによる講義記録』エディット・パルク、2008年。

4) E. Komatsu, *F.de Saussure Deuxieme, cours de linguistique générale.(1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*,(Oxford: Pergamon Press, 1997) とその翻訳である相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)』エディット・パルク、2006年。

5) S. Bouquet & R. Engler, *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*, (Paris: Gallimard, 2002) とその翻訳である松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集「I 自筆草稿『言語の科学』』岩波書店、2013年。

ただし松澤和宏自身も認めるように⁹⁾、最新の Saussure の自筆草稿自体もまだ断片的な部分が多いのも事実である。そしてこれまでの Saussure 研究の歴史がそうであったように、現時点で最新かつ最良のものと思われる小松や松澤らの研究成果も、今後新たな追加資料の発見により主張内容が塗り替えられる時が来るかもしれない。しかし新たな言語研究に向け、過去の贖罪としてわれわれが何を見誤り、どこが誤解されたかを見つめ直すことは決して無意味ではない。むしろ同じ過ちを犯さないよう警鐘の意味も込めて、その誤りを広く知らしめるべきであろう。また、CLGにおける整合性や矛盾点の問題の責任が Bally と Sechehaye にあるとしたら、Saussure は不当に批判されていたことになる。Saussure の本来の言葉と言語学の問題を突き合わせてそこでの不整合や矛盾点に解答を与えることは、後世に残された言語研究家と Saussure 研究家の双方に課せられた使命である。

2. Saussure と時枝誠記の「主体観」

2・1. Saussure の「語る主体 (sujets parlants)」

言語記号に関するソシュールの議論は、一貫して「語る主体」という観点からなされている。「語る主体」という観点はソシュールの理論を支える方法であり、ここでの主体とは言語学における対象不在の問題に対する一つの架空の視点の提供に過ぎない。よってここで問題となるのは実際に話された parole ではなく langue である。それについて立川健二¹⁰⁾は、「語る主体」とはことばを語る主体ではなく、ことばを聴く主体である。そして、主体にとって「聴く」(entendre) ということが、未分化のことばの背後にある<意味>を読みとり、それによって不連続な単位を切りだしていくことである以上、それは同時にことばを「了解する」(entendre) ことに他ならず、Saussure の「語る主体」とは、「聴く」という行為が「了解する」という行為と共犯的であるかぎりにおいて、<聴く主体> (sujet entendant) であると述べる。これは、甲と乙の二人が会話をすると同時に同一相を経ることで互いの意思疎通が図られるとする CLG¹¹⁾ における有名な図説に通じる説明である。そしてそうした同一相の

循環は、音と記号の結び付きにより成立する。この点について *CLG* では以下のように述べられている。

Elle est un objet bien défini dans l'ensemble hétéroclite des faits de langage. On peut la localiser dans la portion déterminée du circuit où une image auditive vient s'associer à un concept. Elle est la partie sociale du langage, extérieur à l'individu. ”¹²⁾

それは言語活動の諸事実の雑然たる総体のさなかにおいて、はっきり定義された対象である。その所在を循環の一定個所に求めることができる、即ちそれは聴取映像が概念と連合する場所である。言語は言語活動の社会的部分であり、個人の外にある部分である；(下線部筆者)¹³⁾

CLG に従えば、「言語記号は二つの側面をもつ心的存在」である。二つの側面のうち、一方は「聴覚イメージ (image acoustique)」、もう一方は「概念 (concept)」と呼ばれ、それが言語記号の本性であるとする。ここでの主張が、時枝が言語の性質として己の「言語過程説」において強く異を唱える中心的部分である。特に Saussure 学説における *langue* という概念が言語を三次元的な物体として捉える要素が強く、それが言語研究の本質を見誤らせている元凶とさえ見ている感がある。この点については、「3・2. 記号と概念の結び付き」で具体的に考察する。

では、時枝は言語における主体の性質をどのように考えていたのであろうか。

2・2. 時枝誠記の「主体的な価値意識」

時枝が『国語学原論』と『国語学原論 続篇』で展開したのが Saussure の学説批判と己の主張する言語理論である「言語過程説」である。この考えについては松中¹⁴⁾で子細に紹介し、また時枝の著書の大半において詳細に語られているので、そちらを参照されたい。しかし時枝の主張点が多く、点で Saussure の学説と類似性を持つことは、松中において指摘したとおりである。こうした類似性はなぜなのか。

そして Saussure の「語る主体」という考えに対して、時枝が「言語過程説」の中で繰り返し強調するのが「主体的な価値意識」という観念であり、言語表現の成立には“主体 (話し手) ”、“場面 (話し手の相手である聴き手) ”、“素材 (表現される事物または観念) ”の三つの存在が必須条件であるとする。その上で時枝は、「言語記号は二つの側面をもつ心的存在である」とする *CLG* の学説に対して、以下のように異を唱える。

言語を表現過程の一形式であるとする言語本質観の理論を、ここに言語過程説と名付けるならば、言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するもので

あって、言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである。¹⁵⁾

ここに言語研究の主体と云ったのは、必ずしも甲とか乙とかの特定個人を意味するばかりでなく、特定個人の言語を通して主体一般を考えることを意味するのである。故に日本語を考える場合には、日本語の主体一般を考えるということとなるのである。¹⁶⁾

元来ソシュール学の対象とする処の言語^{ラング}なるものは、心的なものであると云われて居るがそれは主体的作用の外に置かれて居るものであって、言語主体がこれを用いる時にはそこに関係が生ずるが、それが無い限り極めて客観的な性質を持ったものであって、これに就いて価値を云うことが既に矛盾して居る。¹⁷⁾

対象の観察とその分析は、その対象に規定されるということは、本論の最初に私が述べたことである。(中略)私は、この、対象が方法を規定するという仮説的理論に立って、言語研究の方法は、先ず対象である言語自体を観察することから始められねばならないと考えるのである。言語学の体系は、実に言語そのものの発見過程の理論的構成に他ならないのである。(中略)ソシュールが、言語の分析に用いた方法を、その対象との相関関係に於いて見る時、はたして右の如き方法が守られているであろうか。ソシュールの言語理論に対する疑は先ず最初にこの点に存するのである。¹⁸⁾

言語過程観は、(中略)言語を、概念と音声との結合体としてではなくして、表現素材である事物或は観念を、概念化し更にこれを音声によって表白する主体的表現行為の一形式と観ずるのである。(中略)それらは言語主体の立場によって規定されるものであるから、これを原本的に溯れば、国語の特質は国語の話手である日本民族の民族精神に由来するものであるということが出来る。¹⁹⁾

ソシュールもいう如く、この「言語」^{ラング}なるものは、概念と聴覚映像とが密接に結合されて居って、互に喚起し合う所のものである(『言語学原論』135頁)。原文に於いては、

Ces deux éléments sont intimement unis et s'appellent l'un l'autre. (Cours de linguistique générale p.99.)²⁰⁾

ソシュール言語学を例にとるならば、伝達は、資材的言語ラングの運用である。言

語学の対象は、ラングの運用の事実即ち言語活動ランゲージュではなくして、伝達以前の資材的言語ラングであり、ラングの性質法則を研究するのが言語学の任務であるとしたのである。このような言語学において、伝達ということは勿論、表現ということすら、問題にされないのは当然である。(中略) ソシユール言語学の立場において、もし、伝達の事実を説明するとしたならば、どのようになるかというに、およそ、次のようなことが、推測されるのである。甲乙の間に、伝達が成立するのは、甲乙が、同じ資材的言語ラングを所有するからである。換言すれば、ラングは、思想伝達の道具として、各人の脳裏に貯蔵されているのであるソシユールは、この事情を、各人が同じ辞書を一部ずつ所有しているに似通っていると説明している(『言語学原論』改訳本 31 頁)。²¹⁾

このように、時枝は Saussure 学説における *langue* を支柱とする言語研究の姿勢とそこで
の主体という観点に反意を露わにする。

3. 考察—Saussure の自筆草稿と CLG の溝—

CLG では言語を支える中枢に *langue* を設定し、その存在が実存体であるとした。そして時枝による Saussure 学説批判は、CLG における *langue* が実存体であり主体の外に置かれるという記述を対象になされた。時枝をして言語過程説の支柱が主体的価値意識であると言わしめたものが、CLG におけるこうした記述である。しかし 1996 年に発見された Saussure の自筆草稿では、それまでの CLG の内容を覆すような言葉ばかりである。

その点について具体的に見ていく。

3・1. 実存体としての *langue*

langue は実存体として我々の外に存在する、というのが CLG での主張であった。それは註 13) で先に見たとおりである。しかし Saussure の自筆草稿では、この点について次のように語られている。

Entité est pour nous aussi : l'être qui se présente.²²⁾

アンティテ
実体とは、私たちにとって、結局、現れ出て来る エートル存在なのです。²³⁾

Dans la langue prise face à face, sans intermediaries, il n'ya ni unités ni entités données.²⁴⁾

媒介なしに直面する ラング言語の中には、ユニテ単位も アンティテ所与の実体もありません。²⁵⁾

La langue n'est pas le phénomène initial.²⁶⁾

ラング
言語は、予めあった事象ではありません。²⁷⁾

(la langue n'existe pas comme entité, mais seulement les sujets parlants!)²⁸⁾

ラング アンティテ
言語は実体として存在しているのではなくて、話す主体の裡にだけ存在しているのです！²⁹⁾

Tout ce qui est contenu dans le cerveau de l'individu, le dépôt des forms entendues et pratiquées et de leur sens, c'est la langue.³⁰⁾

アンディヴィジュ
個人フォルムの脳の中に含まれている一切のものであり、〈聞き取られ〉実践された形態、及びそれらの意味の収蔵庫、〈それが〉ラング言語なのです。³¹⁾

langue の存在について語るこれらの言葉は、これまでの時枝の言語過程説における主張と相違ない。柴田健志³²⁾も指摘するように、この定義以降、Saussure の自筆草稿では第三回講義までの全ての記述で言語や語が動作主として擬人化され、「話す主体の（意識）」と同義的に用いられるようになる。「主体」とはまさに「語る処の主体」であり、言語活動における話者を指す。

また Gadet³³⁾が指摘するように、CLG では langue と parole の対立についての順番が Saussure 自身の本来の姿勢とは異なる。Bally と Sechehayé による CLG の最も大きな特徴の一つは、Saussure の実際の講義とはその構成の順番が逆になっており、CLG では「序論」、「音韻論」、「記号理論」、「共時言語学」、「通時言語学」、「言語地理学」、「結論」という流れで言語の一般理論から始まり、具体論としての各国別の言語を扱う言語地理論が最後に回されている。しかし Saussure の実際の講義ではそれとは逆に、ヨーロッパ各地の具体的言語の諸形態が述べられ、その後でそれらを一般論に抽象する形になっている。

小松英輔³⁴⁾が指摘するとおり、Saussure は langue の一般理論的な言語学ではなく、言語の外的な側面の諸事実を個々に指摘することから始め、その後にそれらの一般論を展開していたが、この構図を無視し言語学とは langue を研究する学問であるとしたのは Sechehayé の責任であり、CLG は Sechehayé によるこうした独断と再創作を完全に受け継いでいる。そうすると、時枝と Saussure の言語研究の姿勢に決定的な違いは見出せなくなるのである。

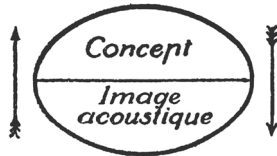
3・2. 記号と概念の結び付き

言語は概念と音声結び付いたもの、という CLG での有名な主張が langue の所在を支える根幹となる。この点について CLG では次のように記述されている。

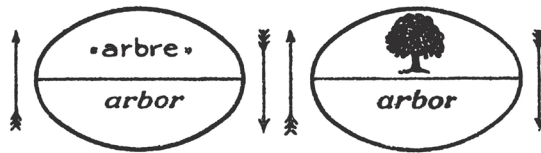
La langue est encore comparable à une feuille de papier : la pensée est le recto et le son le verso ; on ne peut découper le recto sans découper en même temps le verso ; de même dans la langue, on ne saurait isoler ni le son de la pensée, ni la pensée du son ;³⁵⁾

言語はまた、一葉の紙片に比べることができる：思想は表、音は裏である；裏を同時に細分せずに表を細分することはできない。同じく言語においても、音を思想から分離することも、思想を音から分離することも、できないであろう。³⁶⁾

Le signe linguistique est donc une entité psychique à deux faces, qui peut être représentée par la figure:



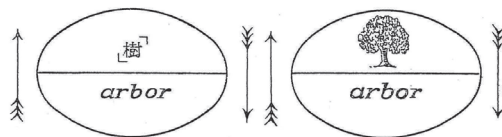
Ces deux elements sont intimement unis et s'appellent l'un l'autre. Que nous cherchions le sens du mot latin arbor ou le mot par lequel le latin désigne le concept «arbre», il est clair que seuls les rapprochements consacrés par la langue nous apparaissent conformes à la réalité, et nous écartons n'importe quel autre qu'on pourrait imaginer.³⁷⁾



それゆえ言語記号は二面を有する心的実在体である；これを図示すれば右の如くなる：



この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する。ラテン語の arbor の意味を求めるにせよ、或はラテン語が「樹」という概念を指すに用いる語を求めるにせよ、言語が認めた照合のみが真相に適うものとして、我々に現れることは明瞭であって、人は他に随意的照合を想像しえようが、我々はそれらをすべて斥けるのである。³⁸⁾



この図における二本の矢は、語を形成する音と意味が互いに惹起する関係にあることを示している。下 (signifiant) から上 (signifié) に向かう左の矢は、音が意味を呼び起こすこと

を、逆に上から下に向かう右の矢は、意味がそれを表現する音を喚起することを示し、音と意味の不可分離性、相互喚起性を示している。しかし原文では「この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する」の部分に対応する言葉はなく、この一文さえもまた Bally と Sechehaye による創作であることが現在では明らかとなっている。

これに対して時枝は、

右の如き、聴覚映像と概念の結合したものが、果して言語活動の単位となるべきそれ自身一体なるものであろうか。ソシユールも述べて居る様に、聴覚映像と概念とは二の要素である（言語学原論一三五頁）。それが如何に密接に結合されて居る時、この結合は一のものではなくして継起的な心的現象と考へなくてはならない。³⁹⁾

言語過程説が、言語を、〈人間の表現・理解の行為である〉と規定する時、先づ対決を迫られたのは、過程説とは全く異なった仮説理論である言語実体観であります。それは、近代言語学の根本理論で、言語を、〈音韻と意味との結合体である〉とする考へ方であります。⁴⁰⁾

そこでは、言語は客体的な思想内容を音声に結合し、文字に記載する主体的な心的作用として、又音声より思想内容を理解し、或は文字より音声及び思想内容を理解する心的作用として把握されているのである。換言すれば、言語は精神的実体ではなくして、人間行為の一形式として見られているのである。⁴¹⁾

と異を唱える。時枝はその過程を、主体が素材を伝達可能な形式に変換する機能、すなわち概念作用と称するのみであり、概念過程において一つの音声が一般的概念と個別概念とを別々に表わすことがあるとして音声と概念との結び付きを否定した。しかし Saussure の自筆草稿では、それさえ時枝の主張と符合するような言葉が見られる。

Le dualism profond qui partage le langage ne reside pas dans le dualism du son et de l' idée, du phénomène vocal et du phénomène mental ; c'est là la façon facile et pernicieuse de la concevoir. Ce dualism reside dans la dualité du phénomène vocal COMME TEL, et du phénomène vocal COMME SIGNE – dufait physique (objectif) et du fait physic-mental (subjectif), nullement du fait 《physique》 du son par opposition au fait 《mental》 de la signification.⁴²⁾

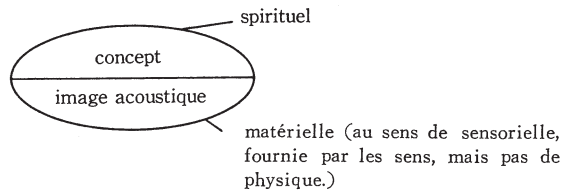
言語を分割する根本的な二元論は、音と観念、つまり音声現象と精神現象の二元論にはない。それは〈二元論を〉考えるうえでは安易で有害な考え方である。この二元論は、かかるものとしての音声現象と記号としての音声現象の二重性にあり、物

理的〈(客観的な)〉事実と物理的—〈精神的(主観的)〉事実の二重性にある。〈意義の「精神的」事実に対立する音の「物理的」事実なのでは〈まったくない〉。43)

Nous n'établissons aucune différence sérieuse entre les termes *valeur, sens, signification, fonction* ou *emploi* d'une forme, ni même avec *l'idée* comme *contenu* d'une forme ; 44)
 われわれは、ある形式の価値、意味〔サンス〕、意義〔シニフィケーション〕、機能ないしは用法の間に、いかなる〈重要な〉差異も設けないし、またある形式の内容〈として〉の観念との間にさえも差異を設けることはしない。45)

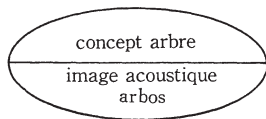
Dans l'association du signe à l'idée il n'y a rien qui lie en soi le signe à cette idée. 46)
 観念と記号の結合の中で、その記号をその観念に結び付けるものが、それ自体には何もあります。47)

Comme nous l'avons reconnu, le signe linguistique repose sur une association faite par l'esprit entre deux choses très différentes, mais qui sont toutes deux psychiques et dans le sujet : une image acoustique est associée à un concept. L'image acoustique 〈n'est pas le son matériel〉, c'est l'empreinte psychique du son.



(中略) Il y a bien un objet qui est en dehors du sujet, et le nom, don't on ne sait pas bien s'il est vocal ou mental : (中略) Le lien entre les deux n'a rien de clair.

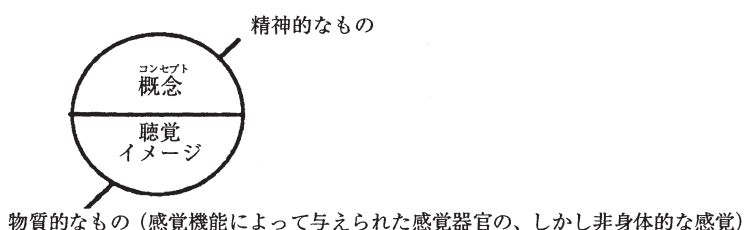
Dans la conception rationnelle nous retrouvons deux termes, mais ces deux seront cette fois :



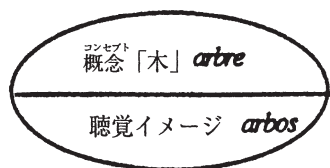
et ils seront tous deux dans le sujet et tous deux psychiques, concen très au même lieu psychique par l'association. 48)

ご承知の通り、言語記号は、非常に異なる二つのものの中にあり、とはいえ二つとも心理的なものであって、主体の中、つまり、聴覚イメージが一つの概念に結

合している主体の中で精神的なものによる結び付きの上に成立しています。聴覚イメージとは、〈物質的な音ではなく〉、心理的な音の刻印なのです。



(中略) 対象物は主体の外にあります。一方、名称は、声音的なものなのか、精神的なものなのかわかりませんが、(中略) 両者の結び付きが、明確ではありません。純粋に理論的な構想の中で、私たちは二つの用語を見出しますが、その二つの用語とは、以下の通りです。



そして、これらは両者とも主体の中にあり、また両者とも心理的なものであって、結合により同じ心理的な場所に収められています。⁴⁹⁾

Ainsi le *lieu* du mot, la sphère où il acquiert une réalité, est purement l'ESPRIT, qui est aussi le seul *lieu* où il ait son sens : ⁵⁰⁾

こんなわけで語の場所は、語が〈実在を獲得する〉領域は、純然とした精神であり、それはまた語が意味〈をもつような〉唯一の場所なのである。⁵¹⁾

ここに見る Saussure の言葉は、時枝が問題にした *langue* の実存体という点でも音と記号の結び付きという点でも、時枝が言語過程説で主張した内容となんら差異が見られないのである。これにより図の矢印の問題とそこで展開された末永朱胤⁵²⁾ の論も解決されるのである。

ここまで見て、CLG の内容的不整合やそれを基に繰り広げられてきた Saussure 学説の批判が、CLG 編者の Bally と Sechehaye による功罪であることが今やいっそう明らかである。Saussure の自筆草稿の内容は、何となれば時枝と同じことを言っているではないか。Saussure の自筆草稿はこれまでの疑問を氷解させる言語学的大発見であると同時に、われわれはまた言語研究の姿勢において過去から現在に至るまで微塵も揺らぐことのない先人の態

度に一抹の安堵を覚えるのである。

4. まとめ—Saussure と時枝の学問的類似—

当然ながら Saussure の自筆草稿にはこれまでの CLG の内容的不具合に対する解答やそこでの主張を覆すもっと多くの具体的言葉が存在する。また、時枝の Saussure 学説批判を基にした主体的意識についても同様である。今回は紙幅の関係から Saussure の自筆草稿と時枝の主張のほんの一部を示すことしか出来なかったが、これまでの考察をまとめると、以下のようなになる。

CLG

記号には差異しかない。

言語は実存体として外に存在する。

記号表現と記号内容は不可分に結び付いている。→記号表現と記号内容は不可分に結び付いてはいない。

Saussure の自筆草稿

→我々はいかなる差異をも設けない。

→言語は実体ではなく、我々の精神の中に存在する。

時枝の言語過程説における Saussure 学説への反論が、CLG でのこうした主張であることはこれまで見てきたとおりである。しかもそれが CLG の中心的主張であり、これまで時枝による反論の中心でもあった。しかし Saussure の自筆草稿では、時枝と Saussure の主張の違いは見られない。またあれほど Saussure 学説に異を唱えた当時の時枝の主張と Saussure の学説との類似点を指摘する声も少なくない。⁵³⁾

こうした時枝学説と Saussure 学説の主体的観点に対して、高木敬生は以下のように、両者に違いがないことを指摘する。

時枝の言語過程はソシユールの発話の回路とほぼ同様の形式をとっていると言ってよいだろう。ただし、ソシユールは話手と聴手の二人を置きその間で記号がやり取りされるのに対し、時枝は、言語の存在条件として「主体」、「場面」、「素材」の三要素を挙げ、「言語は、誰（主体）かが、誰（場面）かに、何物（素材）かについて語ることによって成立するものである」（『国語学原論上』、p.57）とした。「主体」とはまさに「語る処の主体」でありソシユールでいえば話者を指す。⁵⁴⁾

一方松澤の、

おそらく時枝は、一方では通説に従ってソシユールをラングの言語学の提唱者と見なし批判しながら、他方では主体的言語意識を重視した側面を、自説を形成あるい

は補強するために、積極的に摂取していったのではないかと思われる。⁵⁵⁾

という指摘は、衝撃的ではあるが事実であろう。また時枝を批判する声に、時枝の Saussure 学説批判は小林による日本語訳を基になされたものであり、時枝には *CLG* をフランス語の原文で読み解くほどの語学力がなかったというものが根強くあるが、これは私個人があらゆる関係筋に確認した限りでも正しくない。その証拠に、時枝は自身の言語過程説の説明で小林訳でも見られない *CLG* での術語のみならず、本稿の註 20) でも示したように *CLG* での一文をもフランス語の原文のまま引用して示しており、明らかに原文を読んだ足跡があちこちに散見されるのである。そこから先松澤の指摘が正しいことが見て取れるのである。この時代に *CLG* を時枝以上に徹底的に読み込んだのは、訳者の小林英夫を除いて他にいないのではないかとさえ思われる。

後年、小林は時枝との邂逅を次の様に語っている。

かれの有名な言語過程説の解説や批判を今ここでおこなうつもりはない。ただここで明らかにしておきたいことは、その出産の秘密である。結果においてたとえ消極的であろうとも、右の意味で、かれもまたソシユールの影響下にあることは認めざるをえないところである。⁵⁶⁾

こうした現実を目にする時、Saussure の研究姿勢と時枝の研究姿勢は同一のものであると考える方が妥当である。事実、言語とは *une entité psychique* (小林英夫訳「心的実存体」)ではなく、話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得るものであるとする時枝学説の出発点が、自筆草稿によって示された Saussure の言語研究の視点と酷似していることは、疑いようのない事実である。ではなぜ時枝は、註 19) で見たように Saussure の主体的意識と唯一異なるであろう民族精神という観点を主体意識に盛り込んだのであろうか。その点に関しては北原美紗子の次の指摘が示唆的である。

時枝は、日本語の学問である国語学を、ヨーロッパの言語学の一部として扱われることに抵抗した。(中略)日本の伝統的な学問がヨーロッパ言語学によって抹殺されていくことに、危機感を募らせた。(中略)時枝の言語過程説は、日本の国学を近代の言語学に復活させたものとも考えられる。⁵⁷⁾

時枝が言語の主体意識に民族精神という観点をもち込んだのには、朝鮮における国語教育政策という時代背景や京城帝国大学における研究環境も少なからず影響があったと考えられ、それについても研究を進めているが、この問題に関する論考は次の機会に譲ることにする。

註

- 1) 本稿は2014年11月29日(土)～30日(日)に国際基督教大学において開催されたアジア文化研究所公開シンポジウム「アジア文化研究のいま」における筆者の研究発表「ソシュールの『言語学原論』と時枝誠記の『国語学原論』における主観的言語観について」の内容に加筆修正を施したものである。当然ながら、本稿における不備の一切は筆者の責による。
- 2) 国広哲弥「言語と概念」『東京大学言語論集'85』1985年、19頁。
- 3) 国広哲弥「ソシュール構造主義は成立しない」日本エドワード・サピア協会編『研究年報』第20号、2006年、20頁。
- 4) 松澤和宏『生成論の探究』名古屋大学出版会、2003年、425頁。
- 5) 小林英夫訳『改訳新版 言語学原論』岩波書店、1940年、4頁。
- 6) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、299頁。
- 7) 小松英輔著、相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・パルク、2011年、36頁。
- 8) Saussureの研究書や論文は無数に存在し、ここでは紙幅の関係からその全てを上げることはできないが、それらについて詳しくは、松中完二著『ソシュール言語学の意味論的再検討』(ひつじ書房、近刊)において紹介、検討しているのでそちらを参照のこと。
- 9) 松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集「I 自筆草稿『言語の科学』』』岩波書店、2013年。
- 10) 立川健二『《力》の思想家ソシュール』風の薔薇、1986年、52-80頁。
- 11) F.de Saussure, *Cours de linguistique générale*, (Paris: Payot, 1916), 27-28.
- 12) 同上、31頁。
- 13) 小林英夫訳『改訳新版 言語学原論』25頁。
- 14) 松中完二「認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第27号、2001年、197-211頁。松中完二「時枝・服部論争の再考察(Ⅰ)一言語研究の原点の問題として一」『敬愛大学 研究論集』第69号、2005年、109-146頁。松中完二「時枝・服部論争の再考察(Ⅱ)一言語研究の原点の問題として一」『敬愛大学 研究論集』第70号、2007年、175-212頁。松中完二「時枝・服部論争の再考察(Ⅲ)一言語研究の原点の問題として一」『敬愛大学 研究論集』第74号、2008年、49-109頁。
- 15) 時枝誠記『国語学史』岩波書店、1940年、7頁。
- 16) 時枝誠記「言語に対する二の立場—主体的立場と観察者の立場—」『コトバ』7月号、国語文化研究所、1940年、8頁。
- 17) 同上、11頁。
- 18) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店、1941年、60-61頁。
- 19) 同上、66-67頁。
- 20) 同上、84頁。
- 21) 時枝誠記『国語学原論 続篇』岩波書店、1956年、23-25頁。
- 22) E. Komatsu, *F.de Saussure, Troisieme cours de linguistique générale(1910-1911) d'après les cahiers d'Emile Constantin*, (Oxford: Pergamon Press, 1993), 290.
- 23) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003年、159頁。
- 24) E. Komatsu, *F.de Saussure, Troisieme cours de linguistique générale(1910-1911)*, 290.

- 25) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義 (1910-1911)』、159-160 頁。
- 26) E. Komatsu, *F.de Saussure, Troisieme cours de linguistique générale(1910-1911)*, 283.
- 27) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義 (1910-1911)』、146 頁。
- 28) E. Komatsu, *F.de Saussure, Deuxieme cours de linguistique générale(1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*, (Oxford:Pergamon Press, 1997), 93.
- 29) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)』エディット・バルク、2006 年、168 頁。
- 30) E. Komatsu, *F.de Saussure, Premier cours de linguistique générale. (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, (Oxford:Pergamon Press, 1996), 92.
- 31) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第一回講義 リードランジェによる講義記録』エディット・バルク、2008 年、150-151 頁。
- 32) 柴田健志「ソシュール言語学と「主体」の問題：記号論理解のための基礎研究」『京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus』1、1998 年、93-104 頁。
- 33) F.Gadet, *Saussure, une science de la langue*, (Paris: PUF, 1987), 80.
- 34) 小松英輔著、相原奈津江編『もう一人のソシュール』エディット・バルク、2011 年、43 頁。
- 35) F.de Saussure, *Cours de linguistique générale*, (Paris: Payot, 1916), 157.
- 36) 小林英夫訳『改訳新版 言語学原論』149 頁。
- 37) F.de Saussure, *Cours de linguistique générale*, 99.
- 38) 小林英夫訳『改訳新版 言語学原論』90-91 頁。
- 39) 時枝誠記「心的過程としての言語本質観 (一)」『文学』五卷五号、岩波書店、1937 年、10-11 頁。
- 40) 時枝誠記「言語過程説の成立とその展開」国語学会編『国語学』(60)、1965 年、49 頁。
- 41) 時枝誠記『言語本質論』岩波書店、1973 年、365-366 頁。
- 42) S. Bouquet & R.Engler, *Ferdinand de Saussure, Écrits de linguistique générale*, 20-21.
- 43) 松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集』11-12 頁。
- 44) S. Bouquet & R.Engler, *Ferdinand de Saussure*, 28.
- 45) 松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集』26 頁。
- 46) E. Komatsu, *F.de Saussure, Deuxieme cours de linguistique générale (1908-1909)*, 8.
- 47) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第二回講義 (1908-1909)』25 頁。
- 48) E. Komatsu, *F.de Saussure, Troisieme cours de linguistique générale (1910-1911)*, 285-286.
- 49) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義 (1910-1911)』151-152 頁、
- 50) S. Bouquet & R.Engler, *Ferdinand de Saussure*, 83.
- 51) 松澤和宏校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集』136 頁。
- 52) 末永朱胤「ソシュールの記号概念と聞き手の立場—記号の図の矢印について—」成城大学大学院文学研究科編『ヨーロッパ文化研究』第 30 号、2011 年、79-97 頁。
- 53) 前田英樹「ソシュールと“言語過程説”」『月刊言語』7 (3)、1978 年、54-55 頁。北原美紗子「時枝誠記の『国語学言論』を読む—ソシュールの『言語学言論』を併せ読みつ—」『清泉女子大学紀要』51、2003 年、22-24 頁。井島正博「日本語文法から見たソシュール」『月刊言語』5月号、

- 2007年、52-53頁。松澤和宏校注・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集』567頁などを参照。
- 54) 高木敬生「言語の社会性について—ソシュールと時枝から—」成城大学大学院文学研究科編『エウローパー』No.21、2014年、69頁。
- 55) 松澤和宏「時枝誠記の〈主体的立場〉とソシュールの〈話者の意識〉—言語の科学と解釈学」釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房、2011年、117頁。
- 56) 小林英夫「日本におけるソシュールの影響」『月刊言語』1978年3月、44-49頁。
- 57) 北原美紗子「時枝誠記の『国語学言論』を読む」『清泉女子大学紀要』51、2002年、24頁。